

白

櫛

能村 研三

発行所分室

眼力の及ぶかぎりを雁の棹
案の定時雨きたりし北の郭
成り枝の我慢を強ひて林檎熟る
朴落葉はらりと捲れ音もなし

長年親しまれた沖発行所の八幡分室が移転することになった。八幡分室は今から十六年前の平成十八年四月に前の中山分室から移転したもので、発行所とも近く、本八幡駅にも至近距離にあることから多くの人たちにも便利に使うことが出来た。マンションの4階で「沖」編集部毎月の沖誌の編集校正作業や、業務部の沖誌の発送、入金帳簿の整理の作業に使われた。また、ほぼ二月おきに開催される「沖」同人会の常任幹事会もここで行われ、さらにはいくつかのグループ句会の会場としても使われた。書架には「沖」の創刊号から最新号までの「沖」誌がきちつと整理されて収められていたので、古い雑誌を調べたい時は便利であった。また周年の記念大会を開催する時は、前線基地として大きな役割を果たした。

北窓を塞ぎ立て込む予定表
面白き嘘ついてをり煙草

以前の中山分室は畳の部屋で、机の作業の立ち居が不便であったが、椅子と机の作業は快適であった。春の桜が咲く頃になると、階下に見える満開の桜が見事で高い所からの花見が出来た。

遠くより雨見えて来る神の留守
杓置きも杓も青竹神迎

十二月の中旬には市川への移転を完了し、来年からはいよいよ市川分室での活動が始まる。今度の市川分室はJ.Rの快速が止まる市川駅から二、三分のところ、「沖」の新年大会が開催される市川グランドホテルに隣接している。部屋は幾分狭くなるが、今度は一階にあるので出入りには便利である。

時雨忌の配膳僧の白櫛

次の分室にも沖誌のバックナンバーを揃えなくてはならないので年末の年用意もかねて書籍類の整理や、部屋の改造などに長女、次女の夫婦もかりだされている。

日当りの仏具屋で買ふ新暦

中山時代から分室での仕事はほぼ四十年近くになるが、毎月発行される「沖」誌の要となる施設であるので、「市川分室」への大きな役割が期待される。

能村 研三